

第102回 「体育会系」テレビマンが 作ったムード歌謡の名作

ハワイアン歌手としてデビューし、のちにベンチャーズ歌謡『京都の恋』などで名を残した歌手に渚ゆう子がいますが、ハワイアン出身の先例として日野てる子を忘れてはいけません。「渚」同様、「日野」という名前は南洋をイメージさせますが、彼女がブレイクしたのは明るい陽射しとは裏腹の、夜が舞台のムード歌謡でした。

日野のデビューは、昭和39年5月エセル中田が歌っていたハワイアンのカバー曲『カイマナ・ヒラ』でした。そして東京五輪開催後の翌40年1月、デビューして7曲目にリリースしたのが『ワン・レイニー・ナイト・イン・トーキョー』で、B面に収められていたのが『夏の日の思い出』です。

『ワン・レイニー』は同時期に越路吹雪もリリース（編曲・藤家虹二）翌月には和田弘とマヒナスターズが日野のA面と同じ組み合わせで発売（A面は『雨の夜の東京』と日本語に改題。編曲・和田弘）、ブレンダ・

リーも含めた大物歌手たちとの競争になった『ワン・レイニー』は売上枚数ではマヒナが勝り、越路もこ

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

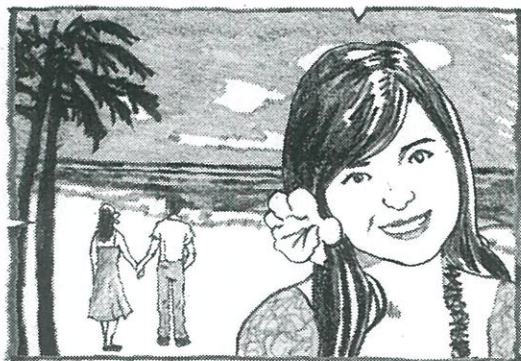


堀井六郎
絵 松本 浦

の曲で同年のレコード大賞歌唱賞を受賞します。

一方、長い黒髪にハイビスカス、ムーム姿の日野は、その美貌に加え、ハワイアンで鍛えた裏声と歌唱力が多くの人の心を捉え、やがてレコードはB面『夏の日の思い出』のおかげでミリオンセラーを記録することになりました。

『夏の日の思い出』も『ワン・レイニー』も同じ人物が作詞作曲しています。当時、テレビ放送を開始して数年後の東京放送（現・TBS）の編成局演出部に在籍し音楽番組を数々担当、ハリイ・ベラフォンテやナット・キング・コールなどの大物外国人タレントの来日公演を放送して成功を収めていた敏腕プロデューサー、鈴木道明です。昭和40年10月開始の『TBS歌謡曲ベストテン』（司会・三木鮎郎）も鈴木が制作した番組でした。『ワン・レイニー』が創作されたのは、少し遡ると昭和37年頃で、



雨の表参道を車で走行中に歌詞とメロディーが同時に浮かんできたそうです。自らが関わっていた音楽番組で女性ジャズシンガー、テリー水島に歌わせたところ、レコード各社からレコード化の依頼があったとのこと。ジャズ好きの鈴木も望もあつたのでしょうか、日野が歌った両曲は、ジャズ・ピアニストの前田憲男が編曲を担当、当時としては、かなりハイカラな歌謡曲に仕上がっています。

40代半ばで二足の草鞋を履き始めた鈴木ですが、戦時中は南方に出征、戦後、朝日新聞からラジオ東京（現・TBS）の設立準備に関わったことから放送界へ転出、『夏の日の思い出』の後は日野と声質の似た西田佐知子に『赤坂の夜は更けて』『女の意地』などを提供しています。

大人のムードあふれるロマンティックな作品イメージと本人の実像とはかなり異なるようで、なかにし礼は実名小説の中で「言葉遣いも行動も相当荒っぽい体育会系人物」として描いています。